

複式カリキュラム作成にあたって

複式学級において年間計画を作成する場合、学校規模や学年構成、教科の特性などによって、さまざまなパターンが考えられます。そこで、ここでは複式学級独自の「同単元指導（いわゆるA・B年度方式，2学年分を合わせて2年間に配分）」による理科の年間計画について紹介し、各学校での複式カリキュラム作成時に参考にしていただければと存じます。

また、別途「A・B年度方式」による年間計画案を例示しますので、そちらも合わせてご参照ください。（前回「平成27年度以降用」として例示した複式カリキュラムを継承し、令和2・4年度がA年度に該当する場合を想定して作成しています。）

1 授業時数の設定と時間割の編成

(1) 授業時数の設定

小学校理科の標準時数（年間授業時数）は、3年生は90時間、4・5・6年生は105時間となっています。

▼ 理科の学期ごとの週数、時数の例

学期	3年	4・5・6年
1学期（12週）	週 2.5（+2）（小計 32）	週 3（+1）（小計 37）
2学期（13週）	週 2.5（+1.5）（小計 34）	週 3（-1）（小計 38）
3学期（10週）	週 2.5（-1）（小計 24）	週 3（小計 30）
年間合計	90	105

※（+2）（+1）などは、長期休みの直前の週で、調整する時数です。

3・4年生の複式学級では、年間授業時数に15時間の違いがありますが、「2学年分を合わせて2年間に配分」するA・B年度方式の考え方に従い、3・4年生の合計授業時数195時間を2年間でほぼ均等に割り振って、各年度に98時間ずつ配分する方法が考えられます。

ただ、年間35週で割り切れない時数ですので、学期ごとに週あたりの時数を変えるなどして調整することが必要です。具体的には、次のように設定できます。（今回例示する年間計画案では、この方法を採用しています。）

▼ 複式学級における週数、時数の例

学期	3・4年複式	5・6年複式
1学期（12週）	週 3（+1）（小計 37）	週 3（+1）（小計 37）
2学期（13週）	週 3（-1）（小計 38）	週 3（-1）（小計 38）
3学期（10週）	週 2.5（-2）（小計 23）	週 3（小計 30）
年間合計	98	105

この場合、年間授業時数が3年生で8時間増、4年生で7時間減になりますので、「2年間で195時間学ぶ」という基本を確認し、保護者等への説明を行う必要があります。

(2) 2学期制について

2学期制では、前・後期の区切りとして、10月上旬に数日間の「秋休み」を設けることが多いようです。そこで、3学期制では9月を3週、10月を4週と想定していますが、2学期制では9月を4週、10月を3週とし、10月第2週を「秋休み」に充てるとよいでしょう。(10月第1週までが「前期」、10月第3週からが「後期」になります。)

▼ 2学期制における週数、時数の例

学期	3・4年複式	5・6年複式
前期(17週)	週3 (+1) (小計52)	週3 (+1) (小計52)
後期(18週)	週3/2.5 (-3) (小計46)	週3 (-1) (小計53)
年間合計	98	105

※3・4年複式では、3学期制と同様、4～12月を週3、1～3月を週2.5としています。

(3) 時間割の編成にあたって

各学校の時間割編成には、さまざまなケースが考えられます。例えば、年間あるいは学期を通してほぼ固定した時間割を実施する方法、他教科(社会科など)と組み合わせて隔週で交互に授業を実施する方法、時間割を月別や週別で作成する方法、ある一定期間に集中的に時間を取る方法、1単位時間(45分間)の弾力化を行う方法(いわゆるモジュール型)、などがあります。

いずれにしても、理科では、生物の成育状況や地域の気象条件などによって、学習活動が計画どおりに実施できない場合があります。そのため、地域や学校の状況を十分に把握した弾力的な年間計画を作成し、運用していくことが必要です。

<注>

- ・学習指導要領 第1章(総則)第2の3(1)オにより、複式学級の場合の教育課程編成の特例(学年別の順序によらない編成)が認められています。また、3(2)ウ(エ)により、各学校における時間割の弾力的な編成が認められています。
- ・複式学級において、教科により特別の教育課程を編成する場合には、所属学年以外の学年用の教科書の支給や併給が認められています。

2 A・B年度案立案時の留意点

(1) 基本的な事柄

系統性……2学年分の内容を2年間に振り分けるので、系統性や関連性に、十分に配慮しなければなりません。

配分……特に下位学年の児童の負担にならないよう、時間数と教材の難易・領域・分野が、できるだけ均等になるように配慮しなければなりません。

「A・B年度方式」における学習内容の履修順序は、児童1人1人に着目すると、次ページの表のようになります。

▼ 複式学級「A・B年度方式」における履修順序

	2018 (H30) 年度 A年度	2019 (H31=R1) 年度 B年度	2020 (R2) 年度 A年度	2021 (R3) 年度 B年度
3・4年 複式	cさん 3年生 dさん 4年生	bさん 3年生 cさん 4年生	aさん 3年生 bさん 4年生	(xさん) (3年生) aさん 4年生
5・6年 複式	eさん 5年生 fさん 6年生	dさん 5年生 eさん 6年生	cさん 5年生 dさん 6年生	bさん 5年生 cさん 6年生

例えば、2020年度（令和2年度）の前後に着目すると、

- ・2020年度の3・5年生（a・cさん）は、2020～2021年度の2年間で「A→B年度」の順に、
 - ・2020年度の4・6年生（b・dさん）は、2019～2020年度の2年間で「B→A年度」の順に、
- それぞれ、「3・4年」「5・6年」の2学年分の内容を学習します。

そこで、「A→B年度」「B→A年度」のどちらの順で学習しても、系統性や関連性等に支障が出ないように、内容を振り分けます。具体的には、次のような点に留意します。

<系統性>

- ・異学年の内容で、系統順に学習する必要があるものは、同年度にまとめて、順に配列します。
- 「3年 電気で明かりをつけよう」と「4年 電気のはたらき」
- 「5年 電流と電磁石」と「6年 発電と電気の利用」
- 「5年 もののとけ方」と「6年 水よう液の性質」
- 「5年 流れる水のはたらき」と「6年 大地のつくりと変化」

<関連性>

- ・同学年の内容で、特に関連が深いものは、同年度にまとめて、原則近接して配列します。
- 「3年 電気で明かりをつけよう」と「3年 じしゃくのふしぎ」
- 「3年 かげと太陽」と「3年 光のせいしつ」
- 「4年 水のすがた」と「4年 水のゆくえ」
- 「6年 燃焼のしくみ」と「6年 ヒトや動物の体、植物のつくりとはたらき、生物どうしのつながり、自然とともに生きる」

<器具の使い方の指導>

- ・器具の使い方などの初出が、教科書とは異なる学年や単元になる場合があるため、該当紙面や巻末資料の「器具の使い方」紙面を活用するなどして、必要な指導を行います。
- 方位磁針，温度計，顕微鏡など

<他教科との関連>

- ・算数で学習する用語などが、未習になる場合があるため、巻末資料の「理科につながる算数

のまど」紙面を活用するなどして、必要な指導を行います。
→折れ線グラフ（算数4年）、角度（算数4年）、反比例（算数6年）など

(2) 新学習指導要領への移行にあたって

2020年度（令和2年度）から、新学習指導要領の完全実施となるため、学年移動や新規追加の項目について、欠落や重複のないように注意が必要です。

今回の学習指導要領改訂で、学年移動については、2018～2019年度に「光電池」を省略、2019年度に「光電池、水中の微生物、発熱」を省略する移行措置が行われています。複式学級においては、学年移動や新規追加について、次の点に注意が必要です。

<学年移動>

・2020年度の6年生（前ページ「dさん」）は、「水中の小さな生物」を、「5年 メダカのたんじょう」の一部として省略せずに学習する必要があります。

（新課程では「6年 生物どうしのつながり」の一部としてB年度に「水中の小さな生物」を学習しますが、dさんは2019年度に「水中の小さな生物」を含まずB年度を履修済のため、2020年度に学習しないと、未履修になります。なお、2020年度の5年生（cさん）は次年度に学習しますので、2020年度は、6年生のみ自由研究のテーマとして学習するなどの方法も考えられます。）

<新規追加>

・「4年 地面を流れる水のゆくえ」は、2020年度に割り振る必要があります。

（2021年度に割り振ると、2020年度の4年生（bさん）は、この単元を未履修になります。）

・「3年 音のせいしつ」は、2021年度に割り振ることが望ましいです。

（2020年度に割り振ると、2020年度の4年生は、この単元を余分に学習することになります。）

▼ 複式学級「A・B年度方式」における学年移動や新規追加への対応の例

	2018(H30)年度 移行1年目	2019(H31=R1)年度 移行2年目	2020(R2)年度 新課程1年目	2021(R3)年度 新課程2年目
3・4年 複式				[新規]音のせいしつ
		(光電池を省略)	[新規]地面を流れる 水のゆくえ	
5・6年 複式	(水中の微生物を学習)		<u>6年生は、水中の 微生物の学習が必要</u>	
		(発熱を省略) →中学2年へ		[学年移動]光電池・ 水中の微生物

(3) その他の留意点

これまでに挙げた点のほか、転出・転入があった場合や、複式学級が解消されたり、新たに複式学級の実施を始めたりする場合は、それぞれの児童がどの単元を学習済で、どの単元を未習なのかを丁寧に確認した上で、対応する必要があります。その他、地域や学校、児童の状況に応じて、柔軟にカリキュラムを計画、運用していただければと存じます。

以上